

A学校教育目標
国際的視野を持ち、未来を切り拓くグローバルキャリア人としての基本的な資質の育成 [自律]自ら進んで生活を築いていく子ども [尊重]国際的な視野と広い心を持ち、互いを尊重し合う子ども [創造]豊かな感性と探究的な思考力を働かせて、文化を創造していく子ども

Bめざす学校像	C育てたい力・態度	D育て方の方針	【評価項目】 F育て方の具体／重点事項等	自己評価
B1 子どもに対して、自律、尊重、創造に関わる力や態度を育む教育活動を展開することで、学校教育において、「めざす子ども像」の実現を支援する役割を担う。	自律 C1 自分の生活を自分でコントロールする力や態度 C2 みんなにとってのよりよい生活を考え、そのために自分ができることをする力や態度	D1 「小さな社会人」として、信頼されるふるまい方を知ったり、考えさせる。	F1 [◎全職員を巻き込んだ生徒指導]によって、「附小のくらし」を最低基準とした、生徒指導を行うことができたか。	○定期的なふりかえりによって、子どもたちの意識の高まりを感じた。校内での行動変容にはつながった。また、「きまりと向き合う」ことを重要視した生徒指導を行った。その結果、「附小のくらしを守って生活している」という自己評価した児童の割合は96%となった。しかし、校外での行動変容にはつながっていないため、次年度は、登下校に焦点化した取組が必要。
	尊重 C3 他者とは異なる自分の文化や考えを大切にしようとする力や態度 C4 自分とは異なる他者の文化や考えを楽しむ、大切にしようとする力や態度 C5 自他の存在や行動を価値付けすることができる力や態度	D2 自分を表現する経験とともに、自分とは異なる文化や考え方の良さを感じる経験を豊富に設定する。	F2 [◎学年担任制、授業サポーター制の創造的な運営等]によって、教師の指導性を適切に発揮し、日々の学習において、主体的・対話的で深い学びを実現することができたか。	○教員が相互に関わり合う体制によって、どんな子供を育てたいかそのために教員がすべき支援は何かを議論し続ける教員の姿が継続的に生まれている。その結果、「以前より自分とは違う立場の人の考えを大切にしている」という自己評価した児童の割合は88%となった。本校での取組は、神戸市教育委員会の視察、川西市の研修資料活用など、他の自治体からの注目度も高い。
	創造 C6 前例、他者等に依存せず、自分の置かれた状況において、工夫してよりよいものを作り出そうとする力や態度 C7 他者と質の高い合意形成をする力や態度	D3 合意形成を図る過程でその「難しさ」と「大切さ」を感じる経験を豊富に設定する。 D4 子どもの感性を刺激する知的な教育活動の提供をする。	F3 [◎なかよし班支援交流会]によって、異年齢集団での学習を主軸にした特別活動を充実させることができたか。	○全ての行事の前に、支援交流会を設定することで、より質の高い支援ができるように工夫した。また附小マーケットという新規行事を企画・実行することができた。その結果、「私は、以前より自分とは違う立場の人の考えを大切にしている」とふりかえる児童の割合は91%となった。
			F4 [◎附属校園内の連携、◎プロジェクト研究]によって、学術的意義の高い学習を実施し、知的好奇心を喚起することができたか。	○公開発表を3回実施し、公立小学校の教員に本校の実践、研究を公開した。また幼小連携部会での5,6歳合同単元を計画的に実施した。中等教育学校生徒会の訪問や、中等教育学校の学校見学などの機会を設け、附属校園内の連携によって、児童の知的好奇心を喚起した。
B2 保護者に対して、子どもに自律、尊重、創造に関わる力や態度を育むための情報発信・交流の機能を果たすことで、家庭教育において、「めざす子ども像」の実現を支援する保護者をサポートし、導く役割を担う。			(B2) 保護者に対して、子どもに自律、尊重、創造に関わる力や態度を育むための情報発信・交流の機能を果たすことで、家庭教育において、「めざす子ども像」の実現を支援する保護者をサポートし、導く役割を担うことができたか。	○定期的、継続的、意図的な通信の発行、輪番制での発行を行った。その結果、学年だよりを「必ず読んでいる」「大体読んでいる」とふりかえる保護者の割合は100%となった。また懇談会、アンケートで寄せられた保護者の意見に積極的にコミュニケーションを取るようにすることで、学校教育への理解を深めていただく取組をした。
B3 教育界(学会や他学校園等)に対して、大学との連携による学術的な知見と、現場における実践的な知見とを融合した研究成果を発信することで、実践的研究の中核拠点としての役割を担い、教育の質的向上に寄与する。			(B3) 大学との連携による研究を外部発信することができたか。 大学の教育実習計画に基づく教育実習を実施することで、学生の学びを保障することができたか。	○大学との連携によるプロジェクト研究は5本、大学が附属学校を活用して行った研究は3本実施し、学会発表、論文投稿などで外部発信した。また、教育実習では、事前実習44名、本実習35名、インターンシップ1名の受け入れを行い、学生の学びを保障することができた。

学校関係者評価	次年度に向けて
<ul style="list-style-type: none"> ・本年度の目標については、概ね達成されていることが分かり、確実な成果があった一年間だと評価できる。 ・特別の教育課程として1・2年生「せかい」に取り組むことで、低学年から外国の文化や人に触れる機会が確保されることは、国際的視野をもつ子どもを育てる上で有意義だと思われる。 ・学校の取組をより分かりやすく保護者に伝えていく機会があればよいのではないかと。とりわけ、組織的な生徒指導を行っていることについての周知があれば、保護者の安心感も高まると考える。 ・保護者のふるまいについて、学校からの発信や情報提供があれば、よりよい保護者集団になっていくのではないかと。 	<ul style="list-style-type: none"> 主として「小さな社会人」として信頼されるふるまい方を知ったり、考えたりするために、教えることと考えさせることを明確にした生徒指導を行う。 (1) 昨年度整理した「附小のくらし」に基づいた指導を徹底する。とりわけ、登下校に焦点をあてた指導を行う。 主として自分を表現する経験とともに、自分とは異なる文化や考え方の良さを感じる経験・合意形成を図る過程でその「難しさ」と「大切さ」を感じる経験のために、 (2) 教師の指導性を適切に発揮し、日々の学習において、主体的・対話的で深い学びを実現する。 (3) 異年齢集団での学習を主軸にした特別活動を充実させる。 主として子どもの感性を刺激する知的な教育活動の提供のために、 (4) 大学との連携・共同研究、並びに大学附属間の交流を通して、学術的意義の高い学習を実施し、知的好奇心を喚起する。とりわけ、外部発信力の向上を図る取組を進める。 また、保護者の理解を深めるために、各種懇談会の充実を図る。